

## 二〇一四年度春季企画展

### 「世界への跳躍、限界への挑戦」

——早稲田スポーツの先駆者たちとその時代——

伊 東 久 智

はじめに

「早稲田スポーツ」と一口にいつても、担い手である体育各部の数は今や四四を数える。しかし、東京専門学校が早稲田大学へと名をあらためた一九〇二（明治三五）年の時点では、わずかに柔術・撃剣・弓術・野球・庭球・短艇の六部が公認されていたに過ぎない。

本展示会では、それからやや後れて、一九一四（大正三）年に正式な形で発足した競走部にスポットを当てた。今年（二〇一四年）創部百周年を迎えた早稲田大学競走部は、学生陸上界、延いては日本陸上界の牽引車でありつづけ

2014年度春季企画展

入場無料

XL. OLYMPIADE BERLIN 1936

世界への跳躍  
限界への挑戦

早稲田スポーツの先駆者たちとその時代

W

2014年

3月24日(月)～4月25日(金)

時間：10～17時(入館は30分前まで)  
休館：日曜日  
会場：早稲田大学 早稲田キャンパス  
會津八一記念博物館1階企画展示室

早稲田大学大学史資料センター  
TEL042-451-1343 <http://www.waseda.jp/archives/>

岡田神雄

南部忠平

西田修平

沖田芳夫

2014年度春季企画展ポスター

てきた。その歴史のなかでも、特に数々のメダリストを輩出した昭和戦前期の黄金時代は、今なお伝説的に語り継がれている。

本展示会では、その立役者ともいべき四人の先駆者——沖田芳夫・織田幹雄・南部忠平・西田修平——を取り上げ、彼らの人間性や互いの友情を読み解こうと努めた。個々人の素質のみが、彼らをメダリストたらしめたわけではない。それは苛酷な練習の日々のなかで、自己に鞭打つモチベーションや、切磋琢磨する仲間があつてこそのことではなかったか——そう考えてのことである。

最後に、本展示会の開催に当たっては、独立行政法人日本スポーツ振興センター（秩父宮記念スポーツ博物館）、広島県安芸郡海田町、北海道開拓記念館、北海道立総合体育センター（北海きたえーる）の各機関・関係各位のご協力を得た。ここにあらためて感謝申し上げたい。

#### 〔付記一〕

会期は二〇一四年三月二十四日から四月二十五日までの一カ月間、会場は早稲田大学會津八一記念博物館一階企画展示室（早稲田キャンパス）であつた。その間、来館者は二、一七〇名を数えた。なお、本展示会については、「朝日新聞」三月二十八日付、「産経新聞」三月三十一日付（都内版）にそれぞれ紹介記事が掲載された。

また会場では、早稲田大学映像情報委員会が晩年の南部忠平に行ったインタビュー映像「金メダリスト 南部忠平氏に聞く」（上映時間一八分）の視聴スペースを設け、リピート再生を行った。

#### 〔付記二〕

以下に記す写真・資料は、展示会場に陳列したものの一部である。

## I 早大競走部の四巨星——イントロダクション

「近代オリンピック復活の父」とも称えられるフランスのピエール・ド・クーベルタン男爵（一八六三～一九三七）は、次の言葉を残している。

その人が成功したかどうかを決めるめやすは、勝利者であるかどうかではなくて、努力をした人であるかないかである。人生でいちばん大切なことは、勝つということではなくて、正々堂々と奮闘することである。

（『オリンピックと日本スポーツ史』より）

早稲田スポーツの先駆者にして、早大競走部黄金時代の立役者——沖田芳夫・織田幹雄・南部忠平・西田修平の四人は、世界的な競技者であつたばかりでなく、まさにクーベルタン男爵が理想としたスポーツマンシップを体現した人格者でもあつた。

この四人が競走部に勢揃いした期間は、必ずしも長くはない。しかし、彼らはその前後を通じて互いを意識し合い、よきライバルとして、またよき友人として、太く長い人間関係を築いていた。一大学の競走部から日本の陸上界へ、そして日本陸上界から世界の舞台へと、まるで階段を駆け上るようにして飛躍していった四人の栄光は、そうした親密な関係に根ざし、支えられていたのである。

沖田芳夫 OKITA Yoshio



一九〇三（明治三六）年三月二十八日

広島県に生まれる。

広島一中時代から投擲競技（砲丸投げ・円盤投げ・ハンマー投げ）の選手として全国的に活躍。

一九二三（大正一二）年四月

早稲田大学第一高等学院に入学。

一九二七（昭和二）年

黄金時代の競走部主将となる。

一九二八（昭和三）年

アムステルダム五輪に出場。

一九二九（昭和四）年三月

早稲田大学商学部を卒業し、三省堂に入社。

その後も、ロサンゼルス五輪・ベルリン五輪のヘッドコーチを務めるなど、指導者として陸上競技の発展に尽力。

一九五六（昭和三一）年

早大競走部の監督に就任（一九六七～）。幾人もの名選手を育て上げる。また、

早稲田アスレチック倶楽部（WAC）会長として競走部OB会を率いる。

二〇〇一（平成一三）年四月二十八日

永眠。

## 織田幹雄 ODA Mikio



一九〇五（明治三八）年三月三〇日

広島県に生まれる。

沖田芳夫とともに、広島一中時代から陸上競技に親しむ。跳躍競技（三段跳び・走り幅跳び・走り高跳びなど）を中心に多才を発揮する。卒業後二年間、広島高等師範付属臨時教員養成所に在籍。

一九二五（大正一四）年四月

早稲田大学第一高等学院に入学。

一九二八（昭和三）年

前回のパリ五輪（三段跳び六位入賞）につづき、アムステルダム五輪に出場。三

段跳びで日本人初の金メダルを獲得。

一九二九（昭和四）年

沖田の後を継いで競走部主将となる。

一九三一（昭和六）年三月

早稲田大学商学部を卒業し、大阪朝日新聞社に入社。

同年、三段跳び世界記録（二五m五八）を樹立。

一九三二（昭和七）年

ロサンゼルス五輪に出場。

その後も新聞記者を務める傍ら、博識の理論家として後進の指導に当たる。

一九六五（昭和四〇）年

早稲田大学教授となる（一九七五年）。

一九八三（昭和五八）年

早稲田大学スポーツ功労者第一号となる。

一九九八（平成一〇）年十二月二日

永眠。

南部忠平 NAMBU Chūhei



一九〇四（明治三七）年五月二十四日

北海道に生まれる。

北海中学時代から跳躍競技のほか、短距離走者としても力量を示す。卒業後の一時期、札幌鉄道局に勤務。

一九二六（大正一五）年四月

早稲田大学専門部商科に入学。

一九二八（昭和三）年

アムステルダム五輪に出場（三段跳び四位入賞）。

一九二九（昭和四）年三月

早稲田大学専門部商科を卒業。

その後、満鉄・美津野運動具店を経て、大阪毎日新聞社に入社。織田と同様、運動部記者として活躍する。

一九三一（昭和六）年

織田の三段跳び世界記録樹立と同じ日、走り幅跳び世界記録（七m九八）を樹立（一九七〇年まで日本記録）。

一九三二（昭和七）年

ロサンゼルス五輪に出場。三段跳び金メダル、走り幅跳び銅メダル、四〇〇mリレー五位の大活躍を演じる。

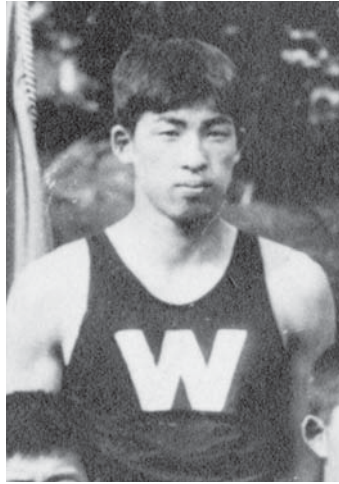
一九八四（昭和五九）年

早稲田大学スポーツ功労者第二号となる。

一九九七（平成九）年七月二三日

またその間、陸上競技の振興に尽力するとともに、京都産業大学教授・鳥取女子短期大学学長なども歴任する。  
永眠。

西田修平 NISHIDA Shuhei



一九一〇（明治四三）年三月二一日

和歌山県に生まれる。父は後の民政党代議士西田郁平。

一九二八（昭和三）年四月

早稲田大学第一高等学院に入学。

中学時代には無名の選手であったが、先輩・織田幹雄の指導もあって急速に頭角を現し、同年、新入生ながら早大競走部英国遠征の代表メンバーに抜擢される。

一九三二（昭和七）年

ロサンゼルス五輪に出場。棒高跳びで銀メダルを獲得。

一九三四（昭和九）年三月

早稲田大学理工学部を卒業し、日立製作所に入社。

一九三六（昭和一一）年

ベルリン五輪に出場。棒高跳びで銀メダルを獲得。銅メダルを獲得した慶應義塾大学の大江季雄とメダルを折半し、つなぎ合わせたいわゆる「友情のメダル」が誕生したのはこのときのことである。



一九八六（昭和六二）年

戦時中は工兵隊員として出征。無事帰還する。

早稲田大学スポーツ功労者第三号となる。

このほか、戦後、早大競走部監督、日本陸上競技連盟理事長なども歴任し、陸上競技界の発展に貢献する。

一九九七（平成九）年四月一三日

永眠。

〔主な展示資料〕

○織田幹雄が練習で使用したスパイクシューズ（広島県安芸郡海田町所蔵）

身長一六七cmの織田を、この外寸わずか二四cm余りのスパイクが支えていた。盟友・南部忠平によれば、織田は練習後、必ずスパイクの手入れを行っていたという。

○南部忠平のユニフォーム（北海道開拓記念館所蔵）

南部が早稲田大学時代に袖を通し、彼とともに風を切ったユニフォームである。「早稲田カラー」をバックに白の「W」が映えるこのデザ

インと配色は、今なお早大競走部の象徴として受け継がれている。

## Ⅱ 陸上競技との出会い

中学三年（一九二〇年）の暮れのある日、織田幹雄は体操教官室に呼び出された。何事かと出向いてみると、彼のように足腰には自信のある猛者が数人集められており、教官から陸上競技講習会への参加を勧められた。織田そのとき、はじめて「陸上競技」なるものが存在するのを知ったという。彼と陸上競技との出会いは、こうして突然訪れたのである。

一方、一九二二（大正一一）年の夏、当時北海中学の四年生であった南部忠平は、先輩の強い勧誘に負けて「徒歩部」（当時の北海中学では、陸上競技のほかに山岳部も含めてこう呼んでいた）に所属していたが、千葉県で開かれた講習会に単身で参加してきた友人が語る新しい理論や練習法に心を奪われた。それから一〇年後、オリンピックで金メダルを獲得することとなる三段跳びの正式な跳び方を知ったのも、このときのことであった。

このように、織田や南部が陸上競技と出会った頃は、エリート予備軍である中学生たちの間でさえまだ競技に対する認知度は低く、指導者・指導書の類も求めて得られるものではなかった。したがって、彼らはまず何にもまして情報に飢えていた。1cmでも遠くに跳ぶには、一秒でも速く走るには、どうすればよいのか――。つまり、彼らは独立した競技者である前に、探求者として五里霧中のなかを歩まなければならなかったのであり、だからこそ、情報を交換し、技術を盗み合う仲間やライバルの大切さを理解することができたのである。



〔主な展示資料〕

○〔写真〕 中学〜高等学院入学前後の沖田芳夫（右）と織田幹雄（左）（大学史資料センター所蔵）

この写真をアルバムに貼付した織田は、その脇に自筆で「仲よし」と書き入れた。

広島一中時代、沖田はもともと織田の一級上の先輩であったが、進級に手間取り、気がつけば織田と同級になっていた。豪放磊落な沖田と、理論家肌の織田——陸上競技を通じて融合したこの二つの個性は、その後、早大競走部に新たな時代をもたらすこととなる。

なお、沖田を追うようにして早大に入学した織田は、彼の下宿に転がり込み、共同生活を営みながら練習に励んだ。

沖田や織田にとって、下宿の部屋は屋根のあるグラウンドであった。疑問が出たり、新しい技術や、ジャンプやスローイングのタイミングの感覚を思いつくと、部屋の中でさつそくやってみた。畳の上はトラックやフィールドになり、出窓はハードルになり、鴨居は棒高（跳）や走高跳のバーになった。織田はよく本を読み、理論を吸収し、競技技術を分析し、総合し、新しい技術を創出した。それに対して沖田は、内外の投擲フォームの写真を集めて、眺めている。その写真から新しい技術を身体で感じてゆくという方法であった。

（『沖田芳夫伝 グランドに生きる』より）

○織田幹雄のスクラップブック 大正年間 二冊（大学史資料センター所蔵）

陸上競技をはじめた広島一中時代から、織田は関連する新聞・雑誌記事を丹念に調べ上げ、スクラップしていった。学究肌で几帳面な織田の性格を窺うことができる。

### Ⅲ 早稲田大学時代と三度のオリンピック

#### 1 早稲田大学競走部

沖田芳夫は中学時代から、早稲田大学への進学を公言していた。無双の投擲陣を誇る早大競走部への憧れからである。織田幹雄も、やはり沖田を追って強豪・早稲田の一員となることを選んだ。

また、一九二五（大正一四）年、第七回極東大会（マニラ）に参加するため、神戸港を出発した南部忠平は、ある不思議な光景に接した。いつまでも追いかけてくる一隻の舟から、「都の西北」が聞こえてきたというのである。それは、同大会に参加する早大の選手に対する学生や校友たちのはなむけの合唱であった。以来、南部もまた「早稲田がいっぺんに好きになって」しまった。

早大競走部の練習は、毎日午後三時頃から第一高等学院グラウンドで行われた。入学一年目の織田は、すでに（パリ）オリンピック入賞選手であったが、授業が終わるや真つ先にグラウンドに飛び出し、上級生がやってくるまでに器具の準備やトラックの整備を済まさなければならなかった。

さらに、彼らの練習はグラウンドの上だけで完結するものでもなかった。例えば、織田は日本にはまだ少なかった指導書を海外から取り寄せては研究を怠らなかつたし、南部は練習後、友人たちと銭湯に出かける際には必ずバトン

を持参し、道中、バトンパスの練習に励んだと回想している。南部のいうように、「日常生活の中に練習が溶け込んでいた」のである。

〔主な展示資料〕

○〔写真〕第一高等学院グラウンド 一九三二年頃（大学史資料センター所蔵）



「グラウンド」というよりはむしろ「原っぱ」とでも表現したほうがよさそうにもみえるが、ここから数々の世界的なアスリートが羽ばたいていった。一周はわずか二八〇mほどしかなく、「どこから円盤や鎗が飛んでくるか見当もつかないし、トラックにいればいたで、後ろから長距離の連中が追い抜いて行くし、横からはハードルの連中がぶつかってくるというありさまで、油断もスキもあつたものではなかった」（南部忠平）という。

場所はちょうど現在の文学学術院校舎（戸山キャンパス）のある高台で、高等学院の校舎は現在の記念会堂の辺りに建っていた（写真にはその屋根のみが映っている）。

○織田幹雄のノート 「練習記録」 一九二六～二八年頃（大学史資料センター所蔵）

日々の練習のなかで、織田は自らの記録の推移をこと細かに記録していた。

# 競走部監督・山本忠興（一八八一〜一九五二）



電気工学の専門家として早稲田大学で教鞭をとった山本は、教育者として、またクリスチャンとして歴史にその名を刻んでいるが、彼がスポーツの振興に果たした役割も決して小さいものではない。

一九一七（大正六）年から二五年の長きにわたって競走部の監督を務めた山本は、多忙にもかかわらず毎日のようにグラウンドを訪れ、部員たちの練習を見守っていたという。彼は陸上競技の専門家というわけではなかったが、その存在は、南部忠平曰く「僕たちの心の支え」であった。「みんなの練習が終るまで木陰に立ちっぱなしで見て下さる姿が、どんなに心強かったでしょう」。

競走部の黄金時代を物語る海外遠征ラッシュも、多くは山本の発案によるもので、その費用の工面にも心を砕いた。

## 織田幹雄と南部忠平

織田君とは、同じ跳躍と短距離を目指していることもあってだんだん打ち解けてきて、そのうち織田君の下宿

にもときどき遊びに行くようになった。そこで見た彼の生活ぶりは実に立派なもので感心することばかりだった。……私はそんな織田君を尊敬し、彼の跳躍中の写真を自分の机の前に貼って、いつも自分を励ましていたものだ。

正月など、私が札幌へ帰郷できないでいると、織田君は、「おれの家へこいよ」と、広島の実家へ連れて行ってくれた。宮島などの名所を見て回ったり、瀬戸内海で獲れたばかりのカキをたくさん食べさせてもらったりした。

（南部忠平『紺碧の空に仰ぐ感激の日章旗』より）

## 新星・西田修平

一九二八（昭和三）年四月、早大の門をくぐった西田修平の加入によって、競走部の黄金時代は本格的な幕を開けた。無名の選手であった西田が急成長を遂げた背景には、彼自身のひたむきな努力と、先輩・織田幹雄の存在があった。

### （織田）

早大に入つて来た西田修平君は、全く無名の中学選手に過ぎなかった。……もちろん、練習でも相手にされず、初めの中は、四人の（先輩の）練習を手伝わされるに過ぎなかった。

四人の練習が終つて、初めて自分の練習に入れるのだが、手をとつて教える人もなく、ただ一人残つて、黙々と練習する様子を、いつも、遅くまで練習している私は、じつと見ていた。……余り熱心なので、私も暇を見て、

時々、練習を手伝ってやつた。

（西田）

日本の一流選手の揃っている早稲田のトラックにしては、甚だお粗末な感じがしたが、出てきた顔を見ればこれは大したもの。あれが沖田さん、住吉〔耕作〕さん、こちらが織田さん、南部さん、アサヒスポーツや新聞で見た顔が目の前にあるのだから驚きだ。……織田さんも、別の種目の練習があるのでおそくなり、たまたま棒高跳のところに来られて、注意を受けたことがある。こんな時は下宿へ帰った後も、うれしくて思い出しては快哉を叫びたくなることもあった。

（『早稲田大学競走部七十年史』より）

## 2 黄金時代の現出——一九二八（昭和三）年

一九二八（昭和三）年、ついに沖田芳夫・織田幹雄・南部忠平・西田修平の四人が早大競走部に勢揃いした。それは早稲田スポーツの歴史にとっても、また日本のスポーツ界にとっても、記念すべき濃密な一年となった。

早大競走部は、五月の第一回日本インカレ、六月の早慶対抗陸上に連勝し、すでに国内に敵なしとして標的を海外に定めた。山本忠興監督の奔走もあって、七月にイギリスの名門・ケンブリッジ・オックスフォード両大学の学生・OBからなるアキレスクラブとの対戦が決まり、オリンピック出場組を中心とする二二名の選抜メンバーは、シベリア鉄道経由で訪欧の途についた。試合自体は僅差で敗れたとはいえ、単独チームによる海外遠征は日本陸上史上初の快挙であった。

そしてオランダ、アムステルダム——。第九回オリンピックに臨んだ日本男子陸上メンバーは一六名、そのうちの

（織田幹雄『跳躍一路』より）

九名までが早大競走部の猛者たちであった。八月二日、三段跳び決勝で織田が一五m二一をマークして日本人初の金メダルを獲得。ついに世界の頂点に上り詰めた。

さらにその後、早大競走部は第二回国際学生陸上（パリ）、日仏対抗陸上（大連）をはしごしてようやく帰国。秋には関東インカレ、そして関西学院との対抗試合でも勝利を収めた。まさしく黄金時代と呼ぶにふさわしい一年は、こうしてまたたく間に過ぎていった。

〔主な展示資料〕

○早稲田大学対アキレスクラブ戦の招待券と記念メダル 一九二八年（大学史資料センター所蔵）

この対抗試合で、織田幹雄は、「競技とは自分が全力をだしたかどうかであり、順位というのは問題でない」という英国選手の言葉に強く胸を打たれた。

つづくオリンピック決勝の前日、「どうしても優勝しなければ」と気負い込んでいた織田は、その言葉を思い起こしてようやく眠りに就くことができたという。

○織田幹雄 アムステルダム五輪三段跳び金メダル 一九二八年（個人蔵）

当時、メダルの授与式は会期の最終日に行われていたが、織田はパリで開かれる国際学生陸上に参加するため出席することができず、水泳で日本人二人目の金メダルを獲得した鶴田義行が、織田の分もあわせて受領した。

○〔写真〕 アムステルダム五輪三段跳び表彰式 一九二八年（大学史資料センター所蔵）

ボールの中央に揚がった特大の日章旗を撮影したもの。織田幹雄はこの写真に「日章旗 君ヶ代乃声 涙!!」と書き込んでいる（西田修平旧蔵）。

3 「友情のメダル」誕生まで——ロサンゼルス・ベルリン五輪

一九三二（昭和六）年の大阪で、織田幹雄と南部忠平は再び顔を合わせた。大学卒業後の勤め先（南部は美津野運動具店、織田は朝日新聞社）が、偶然にも目と鼻の先であったのである。

終業後、関西大学のグラウンドを借りてともに汗を流すようになった二人は、一〇月二七日、同じ大会の舞台で、日本陸上史上初となる世界記録を立てつづけに樹立する（織田・三段跳び一五m五八、南部・走り幅跳び七m九八）。

翌年開催されたロサンゼルス五輪にも、その勢いは持ち越された。織田は足の故障のため出場するのが精一杯であったが、南部はその無念を背負って見事に大役を果たした（三段跳び金メダル、走り幅跳び銅メダル）。一方、コーチとして参加した沖田芳夫は、社会人として働きつつ、時折母校の後輩たちの指導にも当たっていたが、今やその競走部を率いる立場となっていた西田修平も、棒高跳びで初のメダル（銀）を獲得した。

そしてさらに四年後、一九三六（昭和一一）年、ベルリン五輪——。ナチス・ドイツが命運を賭したこの大会でも、日増しに濃くなる戦雲を払いのけるかのような、干戈を交えない「激闘」が人々に感動を与えた。西田、大江季雄（慶應義塾大学）、そしてアメリカのメドウズ、セフトンの四人で争われた棒高跳びの決勝はまさにその象徴であった。

メドウズの優勝が決まり、西田・大江が二位・三位のいずれかであることが確定した時点で、西田と大江は戦うことを止め（公式発表では西田二位、大江三位）、帰国後、銀メダルと銅メダルを折半して接着。いわゆる「友情のメダル」

が誕生した。

○南部忠平 走り幅跳び世界記録表彰状 一九三二年一月二〇日（北海道開拓記念館所蔵）

○〔写真〕 ロサンゼルスへ向かう船上での選手たち 一九三二年（大学史資料センター所蔵）

左から一人目が南部忠平、三人目が沖田芳夫、六人目が織田幹雄、七人目が西田修平。



○南部忠平 ロサンゼルス五輪三段跳び金メダル（北海道開拓記念館所蔵）・走り幅跳び銅メダル（個人蔵） 一九三二年

織田幹雄と同様、南部も足に不安を抱えており、走り幅跳びは3位に沈んだが、三段跳びでは本領を発揮した。

当日、大丈夫かと心配する織田に対し、南部は「心配するな。これから、ゆっくり抜いてやる」と応え、二度目の跳躍で織田の世界記録を示す旗を越えていった。

○南部忠平 ロサンゼルス五輪三段跳び表彰状 一九三二年（北海道開拓記念館所蔵）

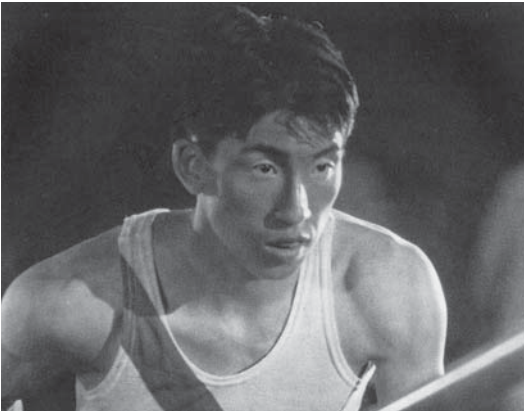
○西田修平 ロサンゼルス五輪棒高跳び銀メダル 一九三二年（大学史資料センター所蔵）

織田幹雄曰く、「朝寝坊で、暢気者、しかもすべての人から愛された」という西田。銀メダルを獲得したこの日も、ギリギリまで「悠々と寝ていた」という心臓の持ち主であった。

○二枚の「友情のメダル」——ベルリン五輪における西田修平（右）と大江季雄（左）



大学史資料センター所蔵



戦時中、沖田芳夫は勤め先の同僚とともに俳句をたしなむようになった。一九四一（昭和一六）年二月八日の句誌には、こんな一句がみえる——「英米に挑戦の日に初氷」。陸上「競」技大会が、陸上「戦」技大会と改称され

#### IV 陸上「競」技から陸上「戦」技へ——先駆者たちの戦中・戦後

○〔袷紗〕第一一回オリムピック遠征記念 早稲田大学体育会 一九三六年（大学史資料センター所蔵）  
 ○織田幹雄「友情のメダル」『新編 新しい国語 五年（I）』所収 一九五六年（大学史資料センター所蔵）



個人蔵



てしまうような時代の到来であった。

戦後、南部忠平はこう述べている——「私は今も「オリンピックに勝てたのは、運がよかったからだ」と思っている」。彼のいう「運」とは、競技当日の「運」だけではない。時代に恵まれたという意味での「運」でもあった。日米開戦前後、彼は幾度か沖縄を訪れ、学校でコーチングを行っている。しかし、そこで知り合った生徒の多くは、生きて終戦を迎えることはできなかった。

一方、ベルリン五輪後の西田修平には、「東京オリンピック」（一九四〇年の開催が決まっていた）での金メダル獲得という目標があった。しかし、自らも従軍を余儀なくされた戦争によって、それは幻と消えた。彼は無事帰還することができたものの、ベルリンの「戦友」・大江季雄は、フィリピンのルソン島で銃弾に倒れた。

そうして暗い時代を生き抜いた四人は、戦後、日本陸上界の再建に身心を捧げるとともに、世界を相手に戦える人材の育成に奔走した。それはいわば、第二の陸上人生のはじまりであった。そして一九六四（昭和三九）年一〇月一〇日、東京——。「幻の東京オリンピック」から二四年の歳月を経てようやく実現した母国でのオリンピック開催を、彼らはどのような思いをもって迎えたであろうか。そのとき、織田は陸上日本選手団強化本部長、南部は同副部長、沖田と西田は強化コーチとなっていた。

最後に、沖田が詠んだ俳句をもう一つだけ、紹介しておこう。——「スポーツの友と一こん春惜む」。

#### ○西田修平 支那事変従軍記章（大学史資料センター所蔵）

西田は工兵隊員として、激戦で知られるシンガポールやコレヒドールの上陸作戦などに参加した。



○織田幹雄のスクラップブック 戦後 二冊（大学史資料センター所蔵）

織田は第一線を退いて後も、陸上界の動静を記録しつづけていた。彼が遺したスクラップブックは膨大な数に上り、その一部が大学史資料センターに保管されている。

○西田修平 オリンピック・オーダー銀章 一九八九年（大学史資料センター所蔵）

オリンピック運動の功労者に贈られるオリンピック・オーダー。展示資料（写真参照）は西田のものであるが、織田幹雄・南部忠平の二人も同じく銀賞を受賞している。

なお、この三人は、スポーツの振興に顕著な功績のあった校友を表彰する早稲田大学スポーツ功労者の第一号（織田）、第二号（南部）、第三号（西田）でもある。

○〔写真〕早大競走部の八〇周年記念式典で顔を揃えた晩年の四人 一九九四年

右から沖田芳夫・織田幹雄・南部忠平・西田修平と青木半治。

先駆者たちの言葉

〔沖田芳夫〕

よく競技で、一生懸命努力し失敗して、運が云々、身体が云々と云う人もあるが、運が悪いのではなく、身体のせいでもなく、相手は自分より以上の努力をしていたのであることに気がつかなければならぬ。

（『沖田芳夫伝 グランドに生きる』より）

〔織田幹雄〕

私は決して天才的な競技者ではなかった。私を強くしたのは、人一倍の努力であった。

（織田幹雄『わが陸上人生』より）

〔南部忠平〕

スポーツだけが人生のすべてではない。これはスポーツ選手にこそ言いたい言葉なのだが、しかしまた、スポーツを通じて得ることのできるものも大きいと思う。

（南部忠平『紺碧の空に仰ぐ感激の日章旗』より）

以上